

碩心

社団法人 日本詩吟学院岳風会 認可
神奈川 碩心会 発行

現在 会員数
62年5月 178名
地区 278名
逗子地区 64名
葉山地区
大船地区
(合計) (520名)

62年5月号 (178号)
発行 者 萃
根 岸 岳
編 集 者 岳
中 村 愛 岳

碩心会

創立五十周年大会迫る

とき・62年6月14日(日)午前9時30分
ところ・横須賀市はまゆう会館大ホール

(横須賀線衣笠駅下車徒歩3分)

右大会もいよいよ間近に迫って参りました。盛会ならんことを祈念し、この辺であらためて、碩心会の詩を紹介することにしたしましょう。

碩心会詩は再建二十周年大会(昭和52年)に名誉会長の松井岳洋先生により作詩されました。記念式典に於いて大合吟を行いますので充分練成を積まれますよう。

碩心会の詩

東海に巍巍たり八朶の峯

千秋仰望す碩人の蹤

一吟能く養う浩然の氣

斯文を興起して祖宗に応えん

語釈○巍巍〓高く大いなるさま○八朶〓富

士山の形容○千秋〓永遠○碩人〓祖宗

範木村岳風先生○斯文〓この道・吟道

巍巍として千秋にそびえる秀嶺富士を遙かに望みながら、正しく祖宗範の流統を仰慕し、一吟能く浩然の氣を養い、先賢の詩心に教化され、自己の人格を高揚しながら、正しい吟道を興起して祖宗に応えよう。

師範位附与基準について

現在の師範位附与基準は次の通りですのでお知らせいたします。

(準師範)

六段以上にして師範に準ずる指導力を備え、認可団体の審査に合格し、且つ、岳風会指定の研修を修了した者で、後進の指導育成について、本会所定の誓約書を提出したる者。

(師範)

奥伝以上にして、人格高潔・吟技及び詩の解明に精通し、指導能力を備え、準師範として三年以上の指導経験を有する者で、複数の準師範、又は二十名以上の後進を指導育成し、認可団体の資格審査を経て、岳風会主催の師範研修会を修了し、且つ、これに合格したる者。

(註)各条に掲げた人格とは、人格向上に努力精通して、岳風流統に徹し、吟道精神を遵奉するの謂である。

(59年4月1日改正)

行事予定

◎ 碩心会理事会の開催

とき・62年5月22日(金)午後7時より
ところ・桜山下会館(七―四九〇二)
議題

- 1・61年度収支決算報告
- 2・62年度予算(案)審議
- 3・各部長報告
- 4・その他

◎ 50周年構成吟リハーサル

とき・62年5月27日(水)午後7時より
ところ・逗子図書館ホール
(構成吟に出吟・演の方は御参加下さい)

◎ 50周年大会 運営に係る打合せ会

とき・62年6月1日(月)午後7時より
ところ・桜山下会館

(大会役員の方は出席して下さい)

大会運営打合せ会

とき・62年6月1日(月)7時より
ところ・桜山下会館

吟のネクタイ使用

6月14日の50周年大会にはお揃いの
ネクタイ使用いたしましょう。

松井正風さん選抜予選会入賞

去る4月19日の右会に松井正風さんが上位入賞、来る7月5日(日)九段会館に於いて第13回選抜者吟道大会に出吟されます。

ぎんなん

漢詩の題名にはよく「行」がついています。広辞苑は、「行」は(1)行くこと。旅。(2)漢詩の一体。楽府から転化したものと説明している。(1)の例は海南行・晚秋舟行・山行であり、(2)の例は棄児行はじめ教本三巻で八題ある。(1)の海南行は海南(さぬき)の地にゆく。舟行は舟でゆく。山行は山みちをゆくでよい。(2)の場合は、〇〇の歌でよろしい。

頭の体操(さあ読んでみましょう)

13	10	7	4	1
燐寸	東風	蒟蒻	麦酒	土筆
14	11	8	5	2
百日紅	松明	河童	鱧鮓	境内
15	12	9	6	3
万年青	隧道	氷柱	蕎麦	雑魚

小林一茶の一生

「我ときて遊べや親のない雀」多くの日本人が親しんできた一句だが、彼の一生は素朴な句からは想像もつかない苦難の歩みで、何か現代の縮図をそこにかい間みる気がする。

略年譜によると、三才で母親に死別、八才の時継母が来て、弟が生まれてから継母のいじめにあい、追い出されるように十五才で江戸へ。江戸でも転々としたが三十才前後からは関西・四国・九州など各地を遍歴。三十九才で父を亡くし、その後、継母、弟との間で激しい遺産争い。

五十二才で二十八才の女性と初婚。四子をもうけたが、四子とも次々に失い、妻とも死別し、その後再々婚を重ね、六十五才で持病の中風が悪化し生涯を閉じたが、死後一子が生まれている。

「瘦蛙負けるな一茶是にあり」は蛙の交合の様をうたったものといふ、「我ときて」は継母にいびられたころを回想しての句だともいわれている。肉親との財産争いや離婚、そして老いらくの恋が目立つという現代にも通じる人間の喜びや悲しみを一身で味わった一茶。その句は二万句という。

書華道・詩舞吟

創立五十周年大会もいよいよ近づいて参りました。四月号にて構成吟「傾心のあゆみ」概略を発表いたしました。今回は、書華道・詩舞吟の詩文を前以って皆さんに知っていただいた方が解りやすいのではないかと思います、掲載することになりました。

(詩舞吟・森戸懷古)

みはるかす 灘の白浪礁嶺みて
古韻あかして富士の近み美し
碧波縹渺として彩雲繞る
杜戸神苑霸君を留む
幕府嘗賦す御殿ケ岩
千貫の老松潮雲に対す
柏楨の飛来葉史を粧い
神楽股々として磯墳を渉る
豆相の連山白鷗を配す
富峯の白妙相海に芬し

(詩舞吟・田越川秘唱)

相模の浦浪須磨の風
叢芒寂々田越の域
見上ぐる空の血に映えて
やがてにたどる我が命

穢土の煩惱消え去りて

念珠のひゞき心澄む

雲上の法衣苦衷を明かす

恩讐の血脈十年の間

天涯空し雙翼墮つ

命運誰か知る悲情の魂

六代碑冥樺樹の下

青苔の涙痕史情を回る

(詩舞吟・静御前)

工藤の銅拍秩父の鼓

幕中酒を挙げて汝の舞を観る

しずやしずしずのおだまきくりかえし

むかしをいまになすよしもがな

一尺の布はなお縫うべし

況んやこれ繰車百尺の絲

吉野山 峯の白雪ふみわけて

いりにし人のあとぞ恋しき

回波めぐらず阿哥の心

南山の雪終古に深し

(書華道吟)

よもの海 波おさまりてこの春は

心のどかに花を見るかな

(くりかえし)

花開けども人来たらず

花落つれども人識らず

春風情有るが如く
吹き送る主人の側

今年の花は去年の好きに似たり

去年の人は今年に到りて老ゆ

始めて知る人老ゆれば花に如かざるを

惜しむべし落花君掃うことなかれ

敷島の 大和心を人問わば

朝日に匂ふ山ざくら花

(くりかえし)

春水四澤に満ち 夏雲奇峰多し

秋月明輝を揚げ 冬嶺孤松秀ず

いとまなき 身も朝夕にいそしみぬ

おもい入りぬるみちのためには

(くりかえし)

華道の精神は調和に在り

煎刀裁断吟哦に対す

自然の景物を瓶裏に収め

方寸の盆中に大河を置く

ふみをよむ いとまいとまに文机の

をがめの花をみるぞ楽しき

練吟メモ

○旧教本に数句掲げられているうち、一番愛吟されている「千島慕情」の漢詩作家である佐々木岳甫先生は、昭和五十五年十月七十三才で亡くられました。先生は、生前木村岳風先生と親交がありました。伝記「木村岳風」の中の追悼座談会（その当時北海道本部顧問）で、次のように思い出をお話しています。

○「木村先生が（昭和二十六年ごろ）私に特に言われた言葉は、『昔は、詩吟は九州から興ったようですから、戦後はどうか北海道から興して下さい』これは、私一人への言葉ではなく、学院全体の会員に言われたこと、思い、印象深く残っています」

○練吟メモ士は、うかつにも右座談会での木村先生の言葉の「昔」を、鹿児島島の「薩摩琵琶」、そして福岡の「筑前琵琶」、熊本の時習館流「肥後調」などに結びつけてしまい、加えて、幕末から明治時代の歴史的背景などを連想して、まこと九州は詩吟発祥の地と理解していたのですが、岳風先生のご事蹟を振り返って見ているうち、も一つの「昔」のあることに気付きました。この方が本当であると思いました。

○戦時中陸軍大将であった故荒木貞夫氏は昭和四十一年五月（当時九十才）次のように木村岳風先生について語っています。

「自分は、昭和五年に熊本師団長として赴任したが、当時は、詩吟というものは全く世の中に知られていなかった。自分は、国民精神作興の為に、是非とも吟詠を普及させたいと考え、始めは神社へ、毎月一日と十五日に奉吟することから始めた。これがいよいよ盛んになり、皇風会と名乗り、熊本に続いて鹿児島、次に福岡から九州全土に詩吟が盛んになった。この当時たまたま熊本へ詩吟奨励のために来ていた岳風君が奉納吟をされたが、これが自分と木村君とのおつき合いの初まりである。何と申しても、木村君は詩吟界の先覚者であり、詩吟が今日の隆盛をもたらした最大の功労者であると言うべきであろう」

○木村岳風先生は、昭和二年二十八才で全国詩吟奨励行脚を始められた。先生自身、当時は工場でも学校でも「詩吟」という言葉さえ知らない状態であったと述懐されている。先生の詩吟普及のための全国行脚、海外行脚は、五十二才の生涯を終えられるまで、文字通り命をかけて続けられた。現代詩吟は、九州からではなく、まさに木村岳風先生によって開拓されたものである。

（入会）

- 796 加賀山治 横浜市泉区新橋町一〇三一
（戸塚）（電）〇四五―八一―二九〇―
 - 797 秋岡 正 逗子市山ノ根三―一七―一四
（山ノ根）（電）〇四六―八一―七五―二七九三
 - 798 杉山美代子 葉山町堀内一六九三―二
（堀内・F）（電）〇四六―八一―七五―二七九三
 - 799 小峰智風（再）葉山町堀内三九四―九
（堀内・C）（電）〇四六―八一―七五―二七九四
 - 800 市瀬美津江 鎌倉市梶原一―二六―七一―〇六
（大船A）（電）〇四六―七一―四七―五二七五
 - 801 岩田礼子（少）葉山町下山口一九二七
（下山口）（電）〇四六―八一―七五―四九七―
- （退会）
- 151 中丸修山（戸塚）

家の建替のため、一時引越というあわただしさに、今年は風に泳ぐ庭の鯉のぼりをみる間もなく季節はすぎ去っていった。詩吟・詩舞のお稽古は勿論、何かと多勢の方々が来て下さった我が家に、未練と愛着心で涙が出ましたが、新築成る喜びに心を切り替えなくては。詩吟の皆様はじめ多勢の方が見えて下さる家。それが私の念願です。私事になりましたが、そんなわけで今月号の月報がおそくなりお詫び申し上げます。